

2021年度

科学する心を育てる  
ソニー教育幼児支援プログラム

# “わくわく”する心を 追いかけて



社会福祉法人 堺暁福祉会

幼保連携型認定こども園 かなおか保育園

# ～目 次～

I.	はじめに .....	1
II.	科学する心の捉え テーマ『 “わくわく” する心を追いかけて 』 .....	1～2
III.	実践事例	
	0歳児 「 この箱なあに? 」 .....	3～4
	1歳児 「 転がる! から転がせる! へ 」 .....	5～6
	2歳児 「 ぽちゃんって 」 「 こうやったら見えるよ 」 .....	7～8
	3歳児 「 しろすなだんごなってる!! 」 .....	9～11
	4歳児 「 何色が出るかな～? 」 .....	12～14
	5歳児 「 転がった! 」 .....	15～18
IV.	全体的な考察 .....	19～20
V.	おわりに .....	20



## I. はじめに

当園は「一人一人を大切にする保育」を保育方針に掲げ、子どもの心に寄り添いながらじっくりと“待つ保育”をすすめている。現在、0～5歳児148名が在籍している。

所在地は百舌鳥・古市古墳群の一角にあり住宅街とはいえ、池や田畑も多く残り、園舎の裏には田畑に沿って農道が続いている。自然と触れ合うことを通して命の大切さに気づいたり、身近な素材を通してモノの特性に気づいたり、ヨダレが出るほど熱中して遊び込んだりする体験が子どもたちの“豊かな心”を育むと考えている。科学する心を育てる7つの視点に示されている「感動し想像する心」「自然に親しみ驚き感動する心」などは、私たちの考える“豊かな心”と共通するものがある。

そこで、保育実践を振り返りながら0歳児から5歳児までの「科学する心」とは何かを考察していくこととする。

## II. 科学する心の捉え・テーマ『 “わくわく” する心を追いかけて 』

私たちが考える科学する心とは、園生活の中で子どもがモノやコトと出会い、関わる中で“わくわく”と心を躍らせながら向き合っていく姿勢だと捉えた。モノやコトと出会った時に心を“わくわく”させ、関わりをもつきっかけとなっていく。関わる中でも楽しさや面白さ、不思議さなど“わくわくする心”は、遊びをより豊かにさせていくことに欠かせないものであると考える。

このような子どものわくわくする心に視点を向け、大切にしながら援助方法や環境構成を考慮していくことで、子どもの遊びにより豊かさをもたらし、より深い学びとなるように支えていくことが「科学する心を育てる」と捉える。

これまで2017年度からソニー教育財団の「科学する心を育てる」論文に取り組み、試行錯誤のプロセスや人との関わりを追究し続けてきた。協議が深められていく中で保育の楽しさや面白さ、子どもの純粋な表情や感情により目を向けていこうという意見があがる。

そこで今年度は、子どもの遊びの原点や子どもと向き合っていく保育者の保育への向き合い方などを見直していくことにした。わくわくするような心の動きを保育者も子どもたちと同様に大切にしながら事例研究をすすめていくことにする。

そこで一つの取り組みとして『わくわく掲示板』を作成して事務所に設置し、保育者が心を揺さぶられた瞬間やぜひ紹介したい子どもたちの面白い場面、子どもが輝いている表情など、わくわくするような写真を掲示し、園全体で共有できるようにした。このような取り組みを基に園全体として保育の楽しさ・面白さを大事にしていく姿勢を持って、職員間での協議を重ねながら園全体の保育の底上げをより図りながら取り組んでいく。

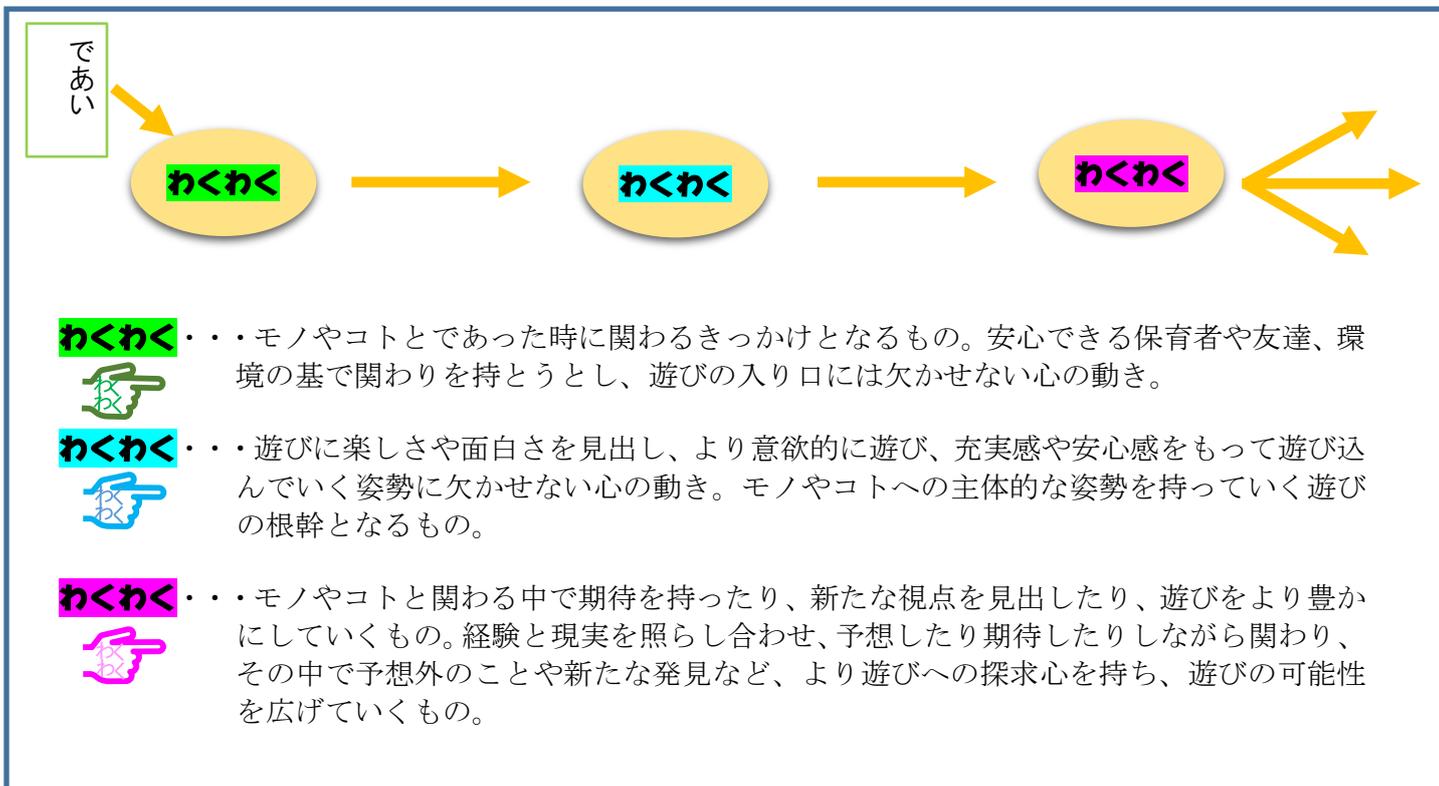


### わくわく掲示板とは・・・

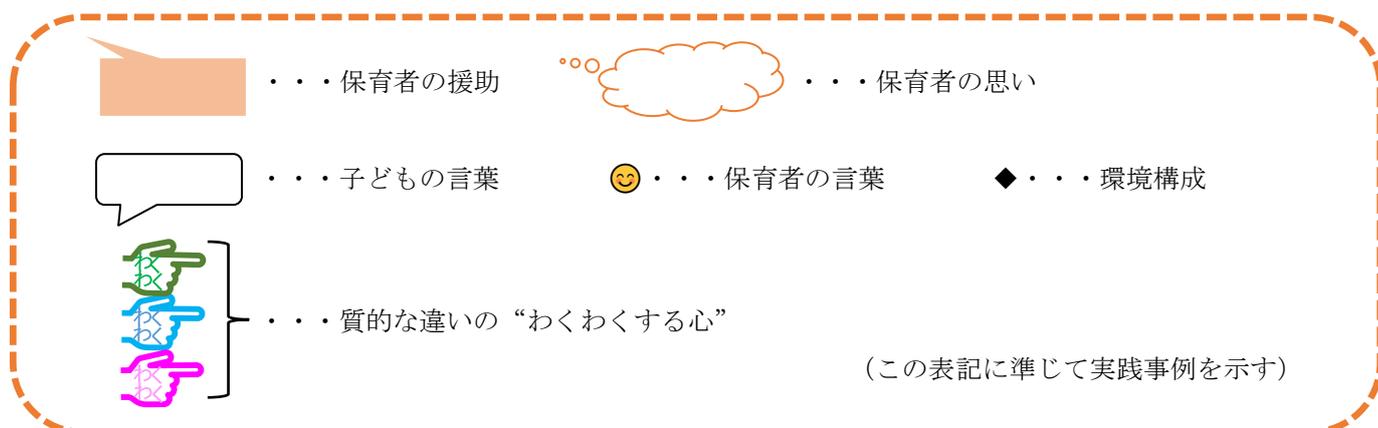
子どものわくわくした心が垣間見られた場面の写真と詳細を掲示する。それに対し、同僚が自由に意見や感想、助言などを付箋にて掲示していく。

【作成の意図】・・・保育の原点である楽しさ・面白さを園全体で共有していく。また、各クラスが今興味を持っている遊びや保育者が心動かされた場面を共有し、園全体で保育していく意識の向上や保育観を共有していく機会にする。若手職員にも事例や写真を通して保育の楽しさ・面白さを感じてもらおうきっかけとしていく。

今年度のテーマを下図を基に掲げ、子どものわくわくする心に視点を向けていき、ただわくわくと心を躍らせているだけではなく、質的な違いなどもあるだろうと考えながら、子どものわくわくする心をより深く捉えていくこととする。また、その質的な違いが子どもの遊びを深めたり、広げたりしていることも踏まえ、どのような科学する心の育ちとなっているのかに着目していきながら実践事例を取り上げる。



### Ⅲ. 実践事例



令和3年度 0歳児 さくらんぼ組 「この箱なあに？」

子ども

保育者

場面1. 6月「そーっとそっと」



A児は身近にある布の玩具を入れて遊んでいる。箱1の構造や、楕円の玩具とい



ことから、出口に引っかけて出てこなかったため、 穴に手を入れ自分で取り出し、保育者と目を合わせる。😊「出せたね」と保育者が応じると笑顔を見せる。その後しばらく遊ぶと、箱2にも興味を示し、側にあったカプセルを穴に入れる。布の玩具とは違い、カプセルが勢いよく転がり出て偶然足に当たり、A児は出てきたカプセルと出口を交互に見つめている。そして、 カプセルを持った手を箱2の底まで入れ声を出し、カプセルを底にそっと置くことを繰り返している。

箱1 直径15cm  
直径11cm  
箱2 直径7.5cm  
直径10.5cm  
直径14.5cm  
布の玩具 直径(縦)×(横) 6cm×7cm

出口から出てきて不思議に思っているのかな  
転がらないようにしたいのかな...?

【振り返り】 A児は、身近にある布の玩具を使って遊び、 穴から出せた喜びを保育者と目を合わせて表現している。『カプセルをそっと置く』といった姿は、 穴の中に入れた手が肩まで入り、しばらく同じ姿勢のままいたことや、カプセルを優しく扱っていることから、A児が夢中になっていることが読み取れる。また、これまでA児は、穴などを開けていない箱にモノを入れたり出したりして遊んだ経験から、箱2から入れたモノが転がり出ることによって不思議に思い、何度も試していた。A児が夢中になっている姿から、どうしたいのか、何をしようとしているのかと側で見守り、じっくり観察するようにした。今後もA児が自ら関わっていく姿を見守っていききたい。

場面2. 7月「ここに入る...?」

A児は、ボール小を両手に持ち穴に入れて、出口の穴から出てくる遊びを繰り返している。



小さい穴にボール大を保育者がさりげなく乗せる。すると、 A児は立ち上がり、ボール大に手を置き穴に押し込んでいる。しばらく押し込む行為を繰り返し、奥の大きな穴にボール大を入れる。

ボール大 直径7cm  
ボール小 直径5cm

大きなボールがあることには気づいていないかな...  
A児が気付くまで見守る  
押し込んだら入るかもしれないと思ったのかな?

【振り返り】 A児は、ボール小を穴に入れて遊ぶことを繰り返しながら、出口から出てくることを確かめていた。 箱2の上の穴にボール大が乗っていることに気づくと、行動に移した姿から「どうなっているのかな?」と確かめてみたい気持ちが読み取れる。保育者は、穴に入らないボールが出てきたらどうするだろうと考え、さりげなく穴にボール大を乗せた。ボールが入らないと、あきらめたり関心を持たなくなったりするのではないかと思ったが、A児は最後まで確かめており、モノと関わる面白さを感じ始めているようだ。今後もA児の思いに寄り添いながら、モノとの関わりがどのように変わっていくのかを見守っていききたい。

場面3. 8月「でてこーい！」



A児は箱2の穴に手を入れ、中に入っているボール大（以下ボールと表記する）を出そうとする。声も盛んに出すが、ボールを握っている手が穴に引っ掛かりボールが手から離れ、なかなか出てこない。「うー」という力強い声と同時にボールが飛び出し、A児の足に当たる。ボールが出てきた穴をじっと見つめている。

今日はボールを入れないんだ...

A児の遊びを見守る

声を出したことで力が入ったのかな？



その後も、立ち上がって違う面の穴に手を入れ、同じようにボールを出そうとするが、穴からボールは出てこない。すると、A児は穴の中を覗いている。再び立ち上がり、違う面の穴に手を入れ、覗くことを繰り返している。

ボールを片手で持てないのかな？

もう出すことを諦めたのかな？



どの面の穴からもボールを出せず、次に周りに転がっているボールを両手で持って穴に入れ始める。ボールを1つ入れたら中を覗くことを5～6回繰り返す。その後、A児はしゃがみ込んで、穴をじっと見ている。



ボールをたくさん入れたことで、取り出しやすくなってるな

A児と目を合わせ、喜びを共感する。

穴に入れた手を掻きだすように動かしていると、ボールが飛び出してくる。はじめは出てきたボールをじっと見ていたが、もう一度同じように手を動かし、ボールを出そうことができると、保育者の方を見て大きな声を出して笑う。😊「ボール出たね」

【振り返り】 A児は、箱2へ駆け寄り、遊び始めたことや、全ての穴からボールが出るか最後まで試していることから、場面1、2の時よりモノと関わる意欲が増しているように感じる。

ボールが思うように取り出せない時間がしばらく続いたが、諦めることなく最後にはボールを取り出し、保育者に何度も見せてくれた姿から、「みて！」「こうしたらできた！」といった喜びや自信を感じる。遊びの中で、A児の手の大きさや巧緻性の発達により、ボールを片手で持つには難しいことがわかったが、夢中になるくらい「箱から出したい」という思いが、掻き出す動きにつながり、満足度も高かったように感じる。

【考察】 A児が初めてのモノと出合う際には、側に保育者がいることで安心して関わることができている。そのような関わりを続けることで、保育者との安定した関係を拠り所に、初めてのモノにも自ら触れるようになっていった。子どもの“わくわく”に視点を置くと、モノに出合った時に、「何だろう？」「触ってみたいな」「どうしてかな？」といった疑問や興味を持つ。すると、触って確かめることを通して、発見や自分でできた喜びが生まれる。A児はモノを触ったり試したりすると、保育者の方を見て気づきや発見を知らせようとしていた。保育者は、A児が今何をしているのか、何をしようとしているのかとじっくり観察し、見守ることや、子どもが向けた眼差しや声に応答的に関わることを大切にしている。すると、だんだんモノと関わる面白さを感じ始め、場面3では、箱の全ての穴からボールを出せるまで試すといった姿を見せた。0歳児なりに考え、試したり、目的を持って遊んだりしている姿に保育者は心を寄せ、丁寧に読み取ることを今後も大切にしていきたい。

# 1歳児 いちご組 「 転がる！から転がせる！へ 」

## 場面1.5月中旬「これなあに？」



A 児が壁に固定しているペットボトルの筒に近づいてきて、じーっと見つめている。

見つめたまま筒に手を伸ばすと、ぐっと体重を掛けながら触ったり、筒の中を覗き込んだりする。



A 児は、筒の入口に腕を肘まで入れてカプセルを入れる。転がると目を見開き、もう一度入れる。



転がる様子を見ながら、繰り返しカプセルを入れていく。友達が入れようとする、その様子をじっと見ていて、カプセルが転がると嬉しそうに笑顔を見せる。



◆保育室の壁に、ペットボトルの筒を傾斜になるように固定する。

“なんだろう？”と考えているのかな

側でそっとカプセルを筒に入れ、入れると転がるという事を視覚的に知らせてみる。

友達がカプセルを入れている時にも“転がるぞ！”と楽しんでいるように感じる

【振り返り】筒を、じーっと見つめる表情からは、遊ぶ前から“これは何？何か分からないけど楽しそう”と感じていることが伺える。目を見開いた瞬間は、カプセルが転がったことに嬉しさや面白さを感じ、瞳を輝かせているように見える。そこから“入れると転がる”ことを面白がり、繰り返し同じ動きや遊びを楽しんでいる。保育者自身、どうすればより楽しさを感じ、遊びを深められるのか難しく感じるころもあるが“転がり”への関心に視点を置くことで必要な関わりや援助が見えてくるかもしれない。嬉しさや楽しさに共感しながら見守りたい。

## 場面2.5月下旬「出せた！」



A 児が、トイレトーパーの芯程の大きさの紙管をペットボトルの筒に入れる。滑るようにして紙管が通っていくと、笑顔になる。そこから、ままごとのアイスやミカンなど様々な丸みのあるものを持ってきて試していく。カプセル以外の物を入れるようになって数日たった頃、友達が入れたフィルムケースの玩具が途中で止まっているところに A 児がカプセルを入れると、玩具にせき止められてカプセルも止まる。「あっ」、😊「止まっちゃたねえ、どうしようか？」、A 児は、しばらく考えてから筒をバンバンと片手で強く叩く。すると振動で玩具とカプセルが動く。嬉しそうに目を見開いた A 児は、両手でさらに強く何度も叩く。筒から玩具とカプセルが落ちてくる。

「出た！出てきたねえ！」、😊「出てきたね、すごいね！」A 児は、笑顔を見せカプセルを拾いあげる。

カプセル以外のものでも丸みのあるものは転がると考えたのかな？

カプセルのように転がりやすいものを選び取るようになるかな？

自分の力でカプセルや玩具を動かせたことが嬉しかったのだな

A 児の嬉しさや気づきに共感する。

【振り返り】繰り返し遊び込むうちに“別の物も入れてみたい！”と新たな遊びが生まれている。入れるものは、カプセルのような球体や円形に近い丸みのあるものを選び取っている。転がるかな？と試してみて、思った通りになると、嬉しさで目を輝かせている。筒を叩いてカプセルを動かせたことで“自分の力で動かせた！”という新たな楽しさを感じているように読み取れる。夢中で遊ぶなかで、遊びに変化が出てきている。新たに感じている楽しさに夢中になって遊べるよう、環境面でも変化を持たせられるようにしたい。

### 場面3.6月上旬「こうすれば出てくるよ」



「でてくるよ！」



A児が、床に置いている紙管をじっと見つめながら両手で持ちあげる。持ち上がると周りを見回しカプセルを手にする。片手で紙管を支えて、中を覗きながら入れてみる。反対側から転がり出てくると保育者の方を見て笑う。😊「転がったねえ」数回繰り返し、今度は座った姿勢で筒を持ち、カプセルを入れるとすぐに、筒の中と出口の方へ交互に目線を向け「ココロー」とカプセルが出てくるところを見ている。😊「ココロ出てきた？」A児は、保育者に目を合わせて笑顔を見せると、もう一度入れる。目線は常にカプセルの行方を追いかけている。転がり出てきたカプセルを取りに行き「出てくるよ」と保育者に見せる。😊「本当だ！出てきたねえ！」と応え、A児の楽しさに共感する。

### 場面4.6月中旬「これもきっと出てくるよ！」



「でてこない」



「あっ！でてきた！」

玩具1

A児が、近くにあった玩具1を持ってきて筒の側に座る。玩具1を手にとると、筒を持ち上げる。一度中を覗き、玩具1を入れる。入れた玩具1が上手く進まずに途中で止まると中を覗き込む。「出てこない」😊「出てこないねえ、どうする？」もう一度中を見てから筒を上下に揺する。目線は筒の出口に向いている。反対側から出てきた玩具1を見て「出てきた！」と嬉しそうな表情を浮かべる。そこから、入れる→揺すって出すを繰り返して遊ぶ。

◆2 m程の紙管を用意する。

保育者が傾けて持ち、中を覗くなど遊んで見せてから床に置く。

自分でも動かそうとするかな？

カプセルが思った通りに動くことを楽しんでいるのかな

筒を扱いやすい大きさにすれば、動きを加えやすくなり、遊びが広がるかな？

◆ペットボトルと画用紙で作った1 m程の筒を用意する。

傾きをきつくするかな？それとも入れるものを変えるかな？

A児の気持ちに共感しながら、どうするか見守る。

揺すって出すんだ！壁のしかけでの経験から自分の力で出せると考えたのかな？

**【振り返り】**  紙管を見つけると場面1と同じように、触れてみたり中を覗いてみたりしているが、すぐに“カプセルを転がせるかな？”と試していることから、これまでの経験をもとに自ら関わってみようとする主体性が感じられる。 「出てくるよ」と転がしたカプセルを保育者に見せた表情からは“やっぱり出てくる！”という自信にも似た喜びが読み取れ、“転がり”を十分に楽しんでいると感じる。 場面4では、“場面2のようにカプセル以外の物でも転がせる”と予想や期待を持って遊んでいることが伺える。保育者は、A児が“やってみたい！”と主体的に遊びを進めるようになっていくことに嬉しさを感じ、子どもの育ちに期待が膨らむ。その気持ちをより育んでいけるよう遊びに寄り添っていきたい。

**【考察】** A児はカプセルの“転がり”に楽しさを感じたことを基に、繰り返し遊ぶなかで気づきや発見が生まれた。そして“自分で転がす”ことへと関心が広がり、夢中になって遊びを発展させている。場面2で、A児が“自分で動かせる”ということに新たな楽しさを感じたと考え、持ち運びのできる紙管や筒を用意したことで、場面4の“これも転がせるはず！”という予測や期待を持った遊びへと繋がれたと感じる。子どもの“わくわく”に視点を置くことで、遊びのなかのどこに楽しさを見出しているのかに気づくことができ、それに添って援助や環境構成を考えることで、遊びをより豊かにしていけるのだと学ぶことができた。また、事例について保育者間で話し合った際に、子どもが感じている楽しさがどこにあるかという点について、様々な視点からの意見も出たことで、自分の考えとは別の読み取り方もあったのではないかと、子どもの育ちを保育者間で共有する大切さについての気づきもあった。この経験を活かして、子どもがどこに楽しさを感じているのか遊びの根幹を読み取り、わくわくする気持ちに寄り添うことで遊びを豊かにし、子どもの育ちを支えていけるようにしたい。また、保育者同士で考えや意見を共有することも大切にしていきたいと考える。

令和3年度 2歳児 もも組 事例1「ぼちゃんって」 事例2「こうやったら見えるよ」

事例1.5月「し～、みてて」



雨が溜まったバケツを覗き込むA児。そっと近づくと「し～、みてて」と石を1つ落とし「ぼちゃんって。」と保育者の

A児、何をしているのかな？  
そっと近づいてみよう  
遊びが中断しないようにそっと近づく  
音が鳴るたび、同じように驚いた表情をし、A児に共感する

顔を見る。B児、C児も加わり、一緒に耳を澄ます。何度か落とすと、立ち上がって高い位置から落としたり、水面の近くから落としたりしている。その後、石の大きさや数を変え、音がなるたび「あっ」と声をあげ嬉しそうに笑って保育者や友達顔を見る。

**【振り返り】** 石を落した時の心地よさを味わったり、音が鳴ることを面白がったりしている。このことが事例1の遊びの根幹となっていることがわかる。それを保育者や友達にも聞いてほしいという気持ちが読み取れる。繰り返す中で音の変化に違いを感じたのか、落とす位置、大きさ、数を変え「次はどんな音が鳴る？」と期待して試しているように見える。保育者は「ぼちゃんっ」という小さな音に気づくA児の感性に驚いたとともに、面白さを感じる。A児の感性を大切にしながら、つぶやきや表情を見逃さないように追いかけていくことにする。



昨日の遊びを覚えているかも...  
A児の行動を見守る  
水たまりで試すんだおもしろいな  
水たまりでもいい音がなるんだ...!

翌日、園庭には雨上がりの水たまりができています。A児は水たまりを見つけると地面に落ちている石を選んで手に握り、水たまりに向かう。①少し大きめの石を1つ握りしめて落とす。ぼちゃん、という音が鳴り嬉しそうに保育者とB児の顔を順番に見る。②石ではなく泥を掴んで落とすと、「ぼちゃん」と石より大きな音が鳴り、心地よさそうな表情をする。③立ち上がって高い位置から泥を落とし、④少し離れたところから投げ入れると⑤いい音が鳴って大笑いしている。

バケツに向かうかな？  
やっぱり！バケツに落としている！  
A児の遊びを真似ることで共感する  
本当に雨の音にそっくり！

数日後園庭に出るとすぐにバケツへ向かい、手に掴んだ砂を落として「ほら、雨の音がするよ」とやってみせる。「ジャジャジャ...」と雨とよく似た音が鳴る。「ほんとだ、雨の音がするね」「先生もやってみようかな」と言う「やってみて」と言い、雨の音がすると保育者を見て笑う。



**【振り返り】** 水たまりを見て、昨日の遊びを思い出したのか、石を選びながら拾う姿が見られた。A児の「昨日の遊びをしたい！」という気持ちが読み取れる。保育者のバケツへ向かうという予想に反し、水たまりで試すという発想に驚かされ、「どうなるのかな？」という思いで見守る。昨日のように繰り返すことなく、一度石を落して鳴ることを確かめると、すぐに落とすものや位置を変えて試している。落とすものや位置を変えることで音も変化するというところに期待を持って試しているように見受けられた。

事例2.6月「なんかあるー」



透明、赤、紫、薄ピンクなど様々な色のカプセルを集めたり砂を入れたりジュースに見立てたりして遊んでいる。D児は紫色のカプセルを地面に近づけたり離れたしたりした時に映った影を見て「きれい」とつぶやく。その後、自分の目にくっつけて周りを見渡し「見えるよ」と保育者に顔を向ける。(真似ながら)「ほんとだ、見えるね～」次にD児は自分の足元にカプセルを近づけ、自分の影に隠れて見えなくなるとD児「ないね～？」と不思議そうにしている。

地面に近づけている。  
遊びが中断しないようにそっと近づく  
どんな風に見えるのかな？やってみよう  
B児を真似てカプセルから景色を覗く



E 児は別の場所（コンクリート）で紫のカプセルを持ち立ったり座ったり手を左右に動かしたりしている。「むらさききれい」「ほら、あった、あった」と言う。近くにいる B 児が「やってみたい」と膝の上に色の異なるカプセルを置き、順番に映す。赤を映し「あ、こっちきれい、あかいろ」と言うと D 児は「どれ？ わ～！ きれいね～」と顔を近づけて見ている。



場所を変え（砂）色々な色を並べ、E 児「これにする」と赤色を選び頭の上に乗せ「こうやったらみえる」と言いながら影を見ている。次に「こうやったらなくなるよ」と自分の体に近づけて（自分の）影の中に入れ影が消えることを友達や保育者に伝える。😊「ほんとだ！ なくなったね、どうしたら見えるの」と聞くと「こう」と自分の影から出して見せる。😊「わ！ 見えたね」

友達がやっているのを見ていたのかな？

繰り返し試す様子を見守る

色が濃い方がきれいだと感じるんだな

友達の発見に共感している...!

E 児は昨年度、自分の影に気付いていたから、カプセルが影だということが分かっているんだな

**【振り返り】** D 児は色とりどりのカプセルに砂を入れて遊ぶうちに、ふと地面に色のついた影が映し出され「これはなんだろう？」と“色の影”に興味をもったことが遊びのきっかけになっている。目に近づけたり地面に映したりを繰り返す姿は、面白さを感じながら遊んでいると読み取れる。E 児は D 児の遊びを真似るように地面に映していることから、D 児の遊びを見て「やってみたい」と感じたのだと考える。

B 児は E 児の遊びを見て「やってみたい」と言葉にしており、映す遊びのきっかけになっている。友達の遊びを見て「やってみたい」「おもしろそう」と遊びのきっかけが友達を介して広がりを見せていることも読み取れる。

E 児が、すぐに場所を変え砂の上に映したのは「ここならどう？」と期待しながら試し、自分の影に入れたり出したりしていることから「こうしたらこうなるよ」と予想しながら試している姿として読み取れる。ふと地面に映った色のついた影をみて「きれい」と感じた D 児の感性に保育者自身も共感し、目に近づけてどんな風に見えるのか試す姿を見て「どんな風に見えるの？」とおもわず試してみたい気持ちになった。子どもの姿を丁寧に読み取ろうとすることで、保育者自身も「おもしろそう」「なんだろう」と子どもの内面に寄り添いながら見守っていくことができる。

**【考察】** 子どもの姿を“わくわく”の視点で捉えたことにより、その子どもの遊びの根幹となるものがどこにあるのかを知ることができた。その上で環境構成や援助を行うことで、遊びがより豊かになっていくことが分かった。事例1のバケツを覗いている姿や事例2のカプセルを地面に近づけている姿は一見何気ないものであるが、子どもの表情や行動、つぶやきを見逃さないよう、子どもの心に寄り添うように視点をもつことで“わくわく”を捉えることができた。子どもの心に寄り添い、共感しながら見守り、時には同じ視線と一緒に遊ぶことで、きっかけになる“わくわく”から期待や予想等をもった、“わくわく”へと変化しながら遊び込んでいく姿を読み取ることができた。また、事例1のバケツに石を落とす遊びをした日、A 児の姿を保護者に伝えると「家庭でもお湯の溜まったお風呂にシャワーを当てると音が鳴ることを面白がり、シャワーヘッドを湯舟に潜らせると音が鳴らなくなることを不思議がっていた」というエピソードを話された。子どもの思いや姿を丁寧に知らせることが、園だけでなく家庭と双方で子どもの、“わくわく”に寄り添うことに繋がる。保育者は見逃してしまいそうな何気ない子どもの姿にも心を向けながら丁寧に読み取ろうとする姿勢をもつことが大切であると考え、保育者自身も心をわくわくとさせながら、子どもに寄り添い見守る姿勢を大切にしていきたい。

# 令和3年度 3歳児 りんご組 「しろすなだんご なるてる！！」

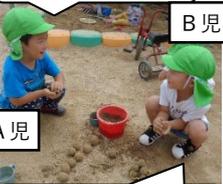
**👉** 進級時から年上の子ども達が泥だんごを作っているのを見て数人の子どもが「おだんご作りたい！」と真似して作っている。



◆泥だんごを作りやすいように土に水をかけて湿らせる

## 場面1. 6月・7月上旬「(白い砂をかけたら)固くなるねん」

「おだんごできた」



B児

A児とB児も真似してやってみるが、泥だんごから手を離すとぐちゃっと崩れてしまう。A児「・・・」B児「あっちでしょう...」他の場所でも作ってみるが手を離すとばらけてしまう。「あかんなあ...」

A児

「ハンバーグみたい」

**👉** 後日、園庭の栽培物あたりでだんごを作っている。いつものように作ってみると「おだんごできた！」ついにだんごを形作ることができた。その後、たくさん作って並べたり、

B児「ハンバーグみたい」と見立てたりして遊ぶ。この日から泥だんごを作る時には、この辺りの土を使って繰り返し遊ぶようになる。



7月頃になるとバケツを使いケーキ作りを楽しむようになる。バケツに水を半分くらい入れ、こぼさないように運ぶと、泥だんご作り用の土となった粘着質の土を入れる。「いっぱいになった！」バケツが砂でいっぱいになると重くなったバケツを別の場所に運び、白くて濁いた砂をかける。😊「どうして白砂をかけるの？」A児「固くなるねん」😊「え！そうなの！？」粘着質の土と白い砂を重ね合わせると「ケーキできた！」と保育者を呼び見せる。😊「うわあ！すごいね！ケーキできたね！」と言葉をかけるとA児とB児は嬉しそうに笑い合っている。その後、2人でケーキを大切に運び園庭の棚に置きに行く。



「(白い砂をかけたら)固くなるねん」

「なんでできないのかな」という不思議さと「できなかった」という悔しさが感じとれる

一緒に泥だんごを作りながらそばで見守り、「できた」という気持ちに共感する

この土は園芸用の土が混ざり粘着質だ！だから形作りやすかったのかもしれない！

A児もB児も諦めずに作り続けていた！やっと作れてとっても嬉しそう！

またあの土を使っている！

泥だんご作りでも白い砂をかけていた！

遊びの様子をそばで見守りながらできて嬉しい気持ちに共感する

2人で作ったケーキをととても大切に思っているんだな！

**【振り返り】** **👉** 年上の子ども達が泥だんごを作っているのを「やってみよう」と憧れを持って、見たり真似たりしており、泥遊びや土に興味を持ち始めるきっかけとなっているとわかる。**👉** 失敗を繰り返しながらも初めて泥だんごが作れた時には、嬉しさと喜びを感じたようで、そこからもっと作りたいという意欲が生まれていることが読み取れる。A児とB児は泥だんごがうまく作れず悔しい経験を繰り返していたが、諦めずに泥だんごを作ることができたのは、最初に感じた憧れが強かったからだと考える。保育者は子どもが主体的に遊ぶ姿をそばで見守ったり、時には励ましたりしながら、失敗してもくじけずに目的に向かう姿を支えることが大切だと気づくことができた。

場面2. 7月中旬「パリパリなってる！」(前日に泥遊びをした場所で...)



A児とB児と同じように泥だんごを作ってきたC児とD児は「せんせー、来て！」「ここパリパリなってる！」園庭の砂の一部が固まっていることに気づき、保育者を呼ぶ。固まった破片を集めながら普段のさらさらの砂と違う土をじっと見つめている。D児「ぎゅってしたら割れるで！」指先に力を入れるとパラパラと壊れることにも驚いている。😊「いつもと違うね。なんでかな？」と一緒に考えていると、D児「どろんこしたから！」と話す。

いつもと違うパリパリの砂に驚いている！

子どもが自分で考えられるように問いを投げかける

前日の泥遊びの土が固まったと考えたのかな？

泥だんご作りの経験から泥は時間が経つと固まるということがわかっているのかな？

場面3. 7月下旬「置いといたら固くなる！」

D児は泥だんごを作ると大切そうに器に入れて保育者に見せる。「いちばん上において！」と園庭の棚に置いておく。次の日、指先で泥だんごをツツツと触ると「固くなった！」と喜んでいる。「せんせー、固くなったよ！」と保育者に見せ😊「すごく固いね！」と一緒に驚く。周りにいた友達も「さわらせて！」「うわぁ！固い！」とその固さに驚いている。😊「そんな固いおだんご、どうやったらできるの？」D児「置いといたら固くなる！」と話す。



D児の泥だんごが固くなったことをきっかけに友達にも興味広がっている！

泥だんごの固さに一緒に驚き共感する

周りの友達にも聞こえるようにどうやって作ったのかをD児に尋ねる



D児は1日置いて硬くなった泥だんごを大切そうに持つと白い砂をかけに行く。「白砂をかけたらかもっと固くなるんだよ」と優しく丁寧に白い砂をかけ、割れ目ができている部分には親指で埋め込むようにしている。白い砂をかけ終わると棚に泥だんごを置き、迎えにきた保護者に「おだんご、明日にはもっと固くなってるからね」と話している。

今までの経験から1日経つと泥だんごが固くなることに自信があるんだな！

次の日、園庭に出るとすぐに泥だんごを確認しに行く。「しろすなだんごできた！」と固くなった泥だんごを「しろすなだんご」と表現しながらそっと触っている。友達が「見せて！」とやってきて、みんなで見たり触ったりしている時に、思いがけず泥だんごが手から落ち割れてしまう。「・・・」悲しそうなD児だったが、友達や保育者に励まされてもう一度作ることにした。

泥だんごが壊れて悲しい気持ちに寄り添いながら、D児を励ます



その後、友達と一緒に泥だんごを作り、棚に置きに行こうとしたが、C児「ここやったらなくなるんちゃう？」と悩んでいる様子だったので😊「どこか違う所に置いてもいいよ」C児「お部屋に置いとく！」D児「うーん。固まるかなあ？」C児に「風あるから大丈夫」と言われ、保育室に置くことに決めた。

泥だんごを大切に思う気持ちを汲み取り違う所に置いてもいいよと提案する

D児は保育室で固まるか不安だったけど、C児の意見を聞いてやってみようと思えたんだな！

「しろすなだんご なるてる!!!」



その日の夕方、D児が泥だんごを確認しにいくと、白く固まっており「しろすなだんごなるてる!!!」と保育者に話す。

「続きしたい!」とだんごを持ち出し白い砂を

かけては、高さ10cmくらいの所からそつ手を離して落とし「割れなかった!」と固くなったこと

を実感していた。また友達が泥だんごにひびが入ったと悲しんでいると「白砂かけたら大丈夫だよ」と教えてあげている。D児の固い泥だんごを見たり触ったりするなかで、クラスの友達も今まで以上に泥だんご作りに熱心に取り組むようになってきている。

「割れなかった!」



落としても割れないくらい固くなったという自信があるんだな!

自分の経験から友達にも「大丈夫だよ」と教えてあげているんだな!

クラスの友達もD児の泥だんごに心を動かされて自分も作ってみたいと思ったんだな!

【振り返り】 D児は場面2でパリパリの土に触れたり今まで泥だんごを作ってきた経験から、泥は時間が経つと固まるということに気づき始めていることがわかる。場面3で泥だんごを置いておこうと思ったのは、今までの経験から得た「置いておくと固まるのでは?」という予測を持って試してみたいという気持ちが生まれたからだとする。次の日、すぐに泥だんごの様子を確認しに行ったことから、泥だんごがどうなっているかを楽しみにしていることがわかる。D児は白い砂をかけると「おだんご、明日にはもっと固くなるからね」とさらに固くなると期待する思いを保護者にも話しており、D児の自信が感じ取れる。その自信はこれまでの経験から得た、時間が経つと泥だんごが固くなるという知識に基づいていると考える。「どれくらい固くなるだろう?」という楽しみな気持ちから、次の日すぐに確認しにいき「しろすなだんごできた!」と喜びを感じている。D児は園庭ではなく保育室で泥だんごが固まるか心配な気持ちがあったが「風あるから大丈夫」などの友達や保育者の意見を聞き、試してみた結果、保育室でも固まることわかり嬉しそうな様子が読み取れる。泥だんごが割れて悲しい思いをしたこともあったが、これまでの経験をもとに「これなら割れない」という自信があったからこそ、落としても割れないかどうかを試したと考える。友達や保育者の励ましやこれまでの経験をもとに諦めずに取り組んだことで、D児にとっての「固い泥だんご=しろすなだんご」を作ることができたとする。

【考察】 泥だんご作りで遊ぶなか、子どもが“わくわく”している瞬間を捉えながら遊びを見守ってきたことで、子どもがどんな思いを持って遊んでいるのか、どんな思いが遊びを豊かにしているのかを読み取ることができた。「年上の子どもへの憧れの気持ち」から始まった泥だんご作りであったが、うまく形を作れなかったり思い通りにならなかったりすることが何度もあった。D児も泥だんごが割れて悲しい気持ちや保育室で固まるかなあ?と不安に感じることもあったが、目的に向かって諦めずに取り組むことができたのは「泥だんごを作りたい」という強い気持ちがあったからだとする。最初は遊びのきっかけであった「年上の子どもが作っていた泥だんご」だったが、繰り返し取り組むうちに「もっと固くて壊れない泥だんご」を作りたいという新たな目的を持つようになり「しろすなだんご」を作ることができた。

8月に入り、クラスの他の子どもも「割れないおだんご」「きれいなおだんご」など、それぞれに新たな目的を掲げるようになってきている。泥だんご作りを見守ってきたなかで、泥だんごを作ることができて嬉しい気持ちに友達や保育者が共感してくれたり、自分が作った泥だんごの固さに驚いてくれたり、泥だんごが割れた時に励ましてくれたりと、色々な場面で支え合っていた。友達や保育者など周りの人の支えが、遊びを継続したり豊かにしたりするために大切だと気づくことができた。今後も子ども同士の関わりをそばで見守りながら、保育者として気持ちに共感したり、うまくいかない時には励ましたり、うまくいくにはどうしたらいいのかを一緒に考えたりしながら、子どもが目的に向かう過程を子どもと一緒に楽しみ共に成長していきたい。

# 令和3年度 4歳児 れもん組 「何色が出るかな～？」

## 場面1. 6月中旬「ぼく・わたしだけの色水」



昨年度、朝顔で色水遊びをしたことを覚えており、今年度も朝顔を育てることにする。👉「早く朝顔咲かないかな」と毎日水やりをするが上手く育たず、色水を存分に楽しめる程の花が咲かない。5歳児が数日前に葉っぱで色水遊びをしていた姿をきっかけに👉「葉っぱでやってみる？」と仰いだし園庭の葉っぱや雑草で色水遊びが始まる。朝顔の時と同様にすりつぶし「葉っぱでも色出てきた！」と試す子どももいれば、すりつぶさずに葉っぱや実を入れてオブジェのように飾る子どももいて、それぞれが自分だけの色水を作っている。

今年度はいろいろな素材を入れている！おもしろくなりそうだな

色水的美しさに共感する

## 場面2. 6月中旬「色が変わる花？」



「紫色になるで」



「ぼくは振ってみる！」



「え！青色になった！」



「出てきた！青色や！なんでやろうな？」

“振ってみる”という発想は初めてでできたな

B児も自分で確かめたくなったのだろうな

翌日、園庭に出るなり色水遊びを始める。早速A児が👉「紫色になるで」と紫色の日々草をすり鉢を使ってすりつぶし始める。一方B児は「ぼくは振ってみる」と力いっぱい容器を振るがあまり色は出なかった。A児の花は数分すると色が変化し始め、A児「え！青色になった！」と目を丸くしてB児に見せる。A児の色水を見たB児は急いですり鉢ですり始め試してみる。B児「出てきた！青色や！なんでやろうな？」と言い2人で色水を眺めている。

**【振り返り】**👉“朝顔で色水遊びがしたい”という思いから朝顔を育てることにした子ども達は「早く朝顔咲かないかな」と期待して来る日も来る日も世話をしていた。予想外に育たなかったことと5歳児が葉っぱで色水遊びをしていたことをきっかけに👉色水遊びに使いそうな葉っぱや花、木の実などを見つけ遊ぶようになった。場面2では👉A児はこれまでの朝顔の色水遊びの経験を基に「紫色になるで」と出てくる色を予想していると読み取れる。予想していた色は出なかったが予想外の結果に不思議さを感じ、新たな発見ができた。これからどのように遊びが広がっていくのか子どもの姿を追いかけていきたい。

## 場面3. 7月下旬「野菜でもやってみよう！」



👉D児「これやってみよう！」と絵本に載っていた色水遊びは、花以外の野菜で色水が作られていた。「野菜でやってみよう」となり、クラスで育てていた不作のトマト(赤と青)を使って色水遊びを始める。



👉C児「トマトは赤いから赤色になるで」D児「でも中は緑やから緑やで」😊「緑のトマトは何色になるのかな？」D児「緑やろ」とそれぞれが出てくる色を予想しつぶし始める。赤いトマトは予想通りの赤や、オレンジ色。緑のトマトは黄色になり、予想と違ったときも色が出てきたことに喜んでいる。



数日後クラスで育てていた茄子が虫に喰われているのを見て👉「そうや！茄子もやってみよう」「紫色が出るやろ」と3人の意見は一致し、すってみると出てきたのはオレンジ色だった。茄子の葉っぱ(紫色)も試し紫色だと予想していたがでてきた色は黄色だった。E児「なんで紫出ないのかな？」と疑問を持つ。

◆保育室に色水遊びの絵本を置いておく

色水遊びの経験を重ねてきて、出てくる色に確信を持った言い方をしているな

疑問を持ち始めたぞ！ここから遊びが更に深まるとうい



その日の夕方、迎えに来た母親にD児は「(茄子は)紫色出えへんねん」と言う。「出るやろ～！家で料理した時に紫色出てたけどな」と母親はD児に返答する。

**【振り返り】** 絵本をきっかけに“野菜でやってみる”という新たな発想が出てきた。これまでは結果を予想して「～色になるかも」と言うことが多かったが、色水遊びの経験を重ねるごとに「～色やで」と断言するようになってきている。“野菜も色が出るかもしれない”と興味が広がり茄子でも試してみることになるが、茄子からは予想外の色が出てきたことで「なんで紫でないのかな」と疑問を持ち始めたのでこれから遊びを深めていけるように“紫色を出したい”という目的を子ども達と一緒に追いかけていきたい。

#### 場面4 - 1. 8月上旬「紫色を出したい！」



茄子の色水遊びで想像していた色が出なかったことから、どうしたら紫色が出るかを考え始める。A児「皮だけでやってみたらどう？」Eさん「それいいな」😊「Dさんのお母さんが家で料理をしたとき、紫色になってたって言ってたよね。」D児「熱い水とか？」F児「冷たい水でもやってみる？」と新しい考えが出てくる。

厨房にピーラー・氷・湯をもらいにいき色を出し始める。



A児「皮を上に向けてたらいいいんちゃう？」D児「ぼくは下に向けてるわ」D児「あ！なんか紫出てきた」(はがれた皮を見て)



A児「皮が剥がれただけやで、ほらここについてるやん」

D児「黄色しか出えへんわ」E児「じゃあ次はあたたかい水(お湯)でやろ」

F児「あれ？やっぱり黄色しか出ない」E児「ちょっと置いとく？」



D児「明日まで置いといたらいいんちゃう？」

水につけて一晩つけておくことにする。

帰り際に茄子の皮を絞る姿もあった。



翌日、登園後すぐ水につけた茄子に駆け寄り、

D児「え～！茶色になってるやん」と残念がる。

紫色を出すためにはどうしたらいいか話し合いをする。E児「なにやっても出ないで」A児「焼いたらいいんちゃう？」D児「それいいかも！」

😊「やってみよう！A先生(管理栄養士)にお願いしてみようか」

茄子の皮を焼いてみることにし、焼いているところを見せてもらう。



「・・・」

焼いた皮を近くで見て、E児「・・・皮茶色になってるやん」

D児「水ないで」E児「じゃあこれをすりつぶしてみよう」すりつぶしてみるが紫色は出なかった。E児「・・・」黄色やん」E児「茄子は紫色出ないんちゃう」D児「ほんまやな」

#### 場面4 - 2. 8月中旬「紫色を出すぞ！」

どうしても紫色を出したい子ども達は話し合いを重ね意見を出し合う。A児「お料理したらでるんやろ」😊「そうみたいだね、Dさんのお母さんが料理するときに色出たって言ってたよね、何を使っているのかな？」「フライパン」「塩」「砂糖」「油」「小麦粉」「醤油」「お茶」・・・とさまざまな意見が出て、塩水・砂糖水・小麦粉水・油水でやってみることになる。F児「フライパンはどうするん？」A児「油入れたらいいやん」D児「熱いやんか～」A児「氷用意したらいいやん」D児「そんなん、氷はでえへんかったし」A児「油はまたA先生に頼んでみたらいいんちゃう？」E児「そうしょっか」

新しい考えが生まれたぞ！どうなっていくのか楽しみだな

興味を持った管理栄養士が紫色を出す方法を調べ担任に伝える(茄子を丸揚げして氷水で冷やすという方法)

「ほらここについてるやん」

面白い！紫色の色水ではなく皮だとよく気づいたな

紫色が出てほしいと強く願っているな

管理栄養士に協力してもらう

管理栄養士から聞いた方法を家で試してみると紫色が出

でた～！！子ども達にもこの喜びを感じてほしいこれは保育者の誘導になるのかな？でも綺麗に色が出る方法があるなら子どもにも見せたいな



翌日、塩・砂糖・小麦粉・油を使って色を出し始める。塩・砂糖からはこれまでのように黄色に近い色水が出て、小麦粉は白く濁った水になる。D児「どれもあかんかったな」A児「あとは油だけやな」管理栄養士が揚げた茄子を持ってくる。B児「なすび光ってる！熱そうやな〜」F児「冷やしたらいいやん」



😊「じゃあこれは油がついて熱いから先生が皮むくね」👉 D児「色出るかな〜」皮をむいていくと薄っすらと紫色が出てくる。👉 D児「紫出てきた」E児「でも薄いな」G児「こすってみたら？」氷水の中で皮をすり合わせる。



D児「お〜だんだん出きたな」すり鉢でもすってみると更に濃い紫色が出る。D児「やっと出たな！大成功やな！」😊「いろいろな方法でやってきたけど、なんで油だったら出たのかな？」G児「魔法ちゃう？」H児「茄子と油は仲間なんや」😊「仲間なのかもね」



その日の午睡後(紫色が出て約4時間後、紫色から黄色に変化する)👉 A児「え！色変わってる」D児「せっかく紫出たのになんでなん」A児「太陽に吸い込まれたんちゃう？」G児「魔法や



で」H児「仲間やったけど喧嘩したんかな」と子ども達は不思議がっている。お迎えに来た母親にD児はまっすぐに紫色が出たことや色の変化したことなどを話に行く。

本当は子どもにさせてあげたかったけれども、危険だし、皆で共有したからな…



「大成功やな！」



探求心を深く持っていたD児が跳びあがって喜んで嬉し！

**【振り返り】** 茄子から予想していなかった色が出てきたことで👉 紫色を出したいという新たな目的が生まれどうすれば紫色が出るかを考え試すことに楽しさを感じているように見える。色々試したものの思うように紫色が出ず、関心が途絶えかけそうになるが話し合いを重ねやっぱり紫色を出したいと新しい方法を考えていく姿に粘り強さを感じた。D児の母親の「家で料理した時に紫色出てたけどな」の言葉をきっかけに👉 次こそは色が出るかもしれないという期待と、いややっぱり出ないかもしれないという不安で揺れ動く子どもの気持ちが読み取れ、紫色が出てきた時は「やっと出た！！」と不安が晴れているようだった。👉 紫色が出て4時間後に紫色から黄色に変化したのを目の当たりにして、更なる探求が始まりそうだと思います、今後も引き続き子ども達と一緒に考え、探求していくことの楽しさを一緒に感じていきたいと思う。

**【考察】** 昨年度の朝顔で色水遊びをした経験を思い出し朝顔で色水を作ろうと“わくわく”が始まったが色水を存分に楽しめる程の朝顔が咲かず色水を作ることができなかった。そこで5歳児が葉っぱで色水を作っていたことが新たなきっかけとなった。また絵本を見て野菜で色水が作れることを知り、花以外にも試してみたいと期待が高まると同時に“わくわく”がどんどん膨らみ夢中になって遊んでいた。これらの経験から使った道具によって色の出方が違ったり、素材をすり鉢ですると見た目の色と同じ色が出るなど法則性を見出していった。そこには必ず友達がいて、楽しさや不思議さを共有したり、自分の考えを伝え合ったりすることで新たな考えが浮かび、共通の目的に向かっていくことがわかった。場面3では紫色が出ると思っていたが出なかったという予想外の出来事が紫色を出したいという目的に向かっていきかけとなるが、場面4-1でやっぱり紫色が出なかったことから「茄子は紫色出ないんちゃう」と“わくわく”が途絶えかける。興味を持った管理栄養士が紫色を出す方法を調べ保育者が試してみると鮮やかな紫色が出た。この感動を子どもにも味わってほしいと思うが、答えを先に知ったことで、子ども主体で進められるだろうかと葛藤する。しかし、子どもの探求心を継続していく一つの環境として子どもの“わくわく”を読み取った保育者のさりげない援助と共に、保護者や園の職員など子どもを取り巻く周囲の大人が遊びに繋ぐことも、より遊びを豊かにするために必要ではないかと感じた。今後も色々な思いを子どもと共有しながら“わくわく”と一緒に感じていきたいと思う。

# 令和3年度 5歳児 ぶどう組 「転がった！」

## 場面1. 7月「あ！転がった！」



Tシャツの玉ねぎ染めの模様作りに使用したビー玉が偶然地面に転がったことに興味を持ちビー玉を転がすおもしろさを感じた。

## 場面2. 7月「ビー玉のコースを作る！」

「これ使ったら転がるで！」  
夢中で転がすA児



A児が違う遊びで使用していた段ボール(平面で約2m細く繋げたもの)を手に取り「これ使ったら転がるで！」と遊び始める。「ほんまや！」と何度もビー玉を繰り返して転がしている。数名が集まってきて繰り返し試すが10回に1回程度しか段ボールの上を転がらず、ほとんど勢いよく床に落ちてしまう。

B児「わかった！壁作ったらいいねん！」A児「どうやって作るん？」  
C児「段ボールは？」B児「わかった！段ボール小さく切ってテープでとめるねん！」C児「やってみよう。先生！段ボールと三つ編みで使うテープ(養生テープ)使いたい！」と壁作りが始まる。

スタート地点を子どもの腰の高さ(約65cm)の位置に決めて段ボールを持っていたが、少し高く(約92cm)持つと先程よりも勢いよく転がることに気づき、高さ＝スピードという仮説を立てて遊び始める。しかし、高くしたことで斜面が垂直になりコースアウトしてしまう。



◆段ボール、テープ、ハサミを用意し自分たちで選び取れるようにする。



【振り返り】偶然転がったビー玉に興味を持ち、身近にあるものを用いると転がせることに気づき遊びが始まった。段ボールをコースに見立て「コース上を転がしたい」という同じ目的やイメージを持ち、どうしたら実現できるか考えながら遊び始めていることが会話から読み取れた。「落とすたくない」という目的を共有し取り組んでいたが高さ＝スピードということに気づき、コース作りよりも速く転がすことへ興味に移り「もっと高くしたらどうなる？」という遊びに変わっていった。その遊び方に納得していない子どももあり、それぞれの子どもの目的がずれ始めその日の遊びはそこで終わる。助言をするべきか悩んだが友達と一緒に目的に向かって子ども達が今後どう実現していくのか一緒に遊びながら見守ることにする。

## 場面3. 7月「コースアウトしたくない！」

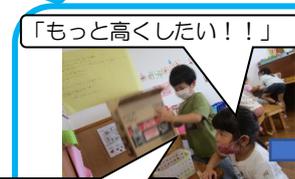


7月9日  
「手を離して倒れへんようにしたほうがいい！」



次の日、机(高さ約43cm)に段ボールをかけて転がして遊んでいる。壁作りは途中だが椅子を数台並べ、トンネルを作ることに面白さを感じている子どももいる。壁が倒れたり、隙間が空いていたりする所がありコースアウトしてしまう。コースアウトせずに転がしたいC児が「ここから出ていくんや！壁作ろう！」と提案し壁が直角になるように貼ったり、隙間がなくなるようにしたりして工夫して作り始める。

作業を見守り、子どもの気づきに共感する



「もっと高くしたい！！」  
「これ使ったら？」



「貼るときに立てて貼って！」



「あ～落ちた。どうやったらいいん。」



C児はコースアウトせずに転がしたいという目的を持っている！友達もその姿に刺激を受けている！



7月12日



写真②

7月13日



緩やかな斜面のため途中でビー玉が止まってしまう。C児は「もっと高くしたい！」と斜面の調整をし、試してみるがコースアウトしてしまう。ビー玉が落ちた所を確認し壁を加えると5、6回に1回コース上を最後まで転がる。段ボールの出口には壁がないので保育室のあちこちにビー玉が転がっていくためゴールを作る。繰り返し遊ぶうちに赤い丸の部分(写真①)でコースアウトしてしまう。ここでも高さが必要だと考え、H児「もっと箱置こう」C児「違うで！箱少なくするねん！」H児「(箱を)減らしたらスピードでやんで」C児「じゃあいっぱい置くわ」と口々に言いながら箱を追加して高さを出す。しかしコースアウトしてしまいC児「壁もちゃんと作ったのになんで落ちるんやろ？」と新しい疑問が浮かぶ。

D児「まっすぐやったら(垂直)落ちる。斜め(坂)にせな。」と椅子を使って斜面の角度を調整する。すると谷ができビー玉が止まったり(写真②)、思うようにスピードがでなかつたりして新たな問題が生まれていく。その都度C児「椅子離して置いたらへこむ(たるむ)から揃えて置こう(写真②)」H児「椅子重ねる？」と話し合い、結果スタートから椅子を3段、2段、1段と続けて並べるとたるみやスピードの問題は解決できた。

友達同士同じ目的を持って遊んでいる！ゴールを作ったことでより目的が明らかになったな♪

垂直になっているからコースアウトしてしまうのかも...気づけなかな？

**【振り返り】** コースアウトせずに転がしたいという思いを持ち、壁を作り終わると「もっと高くしたい！」と身近な物で高さを出せる物を探し、高くしすぎず角度を調整しながら設置している姿から場面2のような速さを求めているのではなくコース上を最後まで転がしたいという目的が読み取れる。壁ができたことで「コースアウトしないはず！」という予想を立て、期待しながら試した。結果は思うようにはいかず、途中で落ちてしまう。予想とは違い上手いかなかったことで新たな気づきとなり、壁をぎゅっと押さえて立てたり、友達と相談したりしながら何度も試す姿が見られ、目的や期待を持ち遊んでいるように伺えた。途中、椅子を並べることがおもしろくなったり、転がっていくビー玉を追いかけたりする遊びに発展しそうになったが、そのたびにC児の目的や期待、疑問を大切に、一緒に楽しんだり共感したりしながら遊んだ。保育者が思う答えやヒントを出せば簡単にコースアウトしないコースを作ることができるかもしれないが互いの思いを出し合ったりしながら友達と一緒にやり遂げてほしい思いもあり引き続き見守ることにする。今後遊んでいく中で子ども達がコースアウトしないためにはどうすればいいか何をきっかけに気付くのか保育者自身も楽しみである。

#### 場面4. 7月「スマートボールおもしろい！」



8月6日



園行事のお祭りごっこに出店する店を決める。お泊り保育の時に実物のスマートボールで遊んだ経験とビー玉コース作りの経験からスマートボール(ビー玉転がし屋さん)を作りたいという意見がでたので作ることになる。作りたいスマートボールを絵に描いてから製作にとりかかる。ゼリーカップなどを貼り付け実物のように仕掛けや点数を沢山取り入れ、完成すると何度も繰り返し遊んでいる。

当日は思うように色々な得点を示した囲いに入らないことやビー玉が止まってしまうことがあり、終了後「全然入らへんかった」「同じ点数のとこばかり入った」という感想があり「新しく作り直したい！」という意見が出る。

◆段ボールや箱などの廃材を集める。

8月11日

「段ボールをにあけてビー玉落ちるようにしよう！」

E児

D児

F児

A児

G児

写真③

D児「おまつりの時みたいにしていいん！」と言い今回は実物のスマートボールを見本にして作り始める。

E児「穴をあけてビー玉落ちるようにしよう！」という提案でビー玉が入る大きさを繰り返し確認しながらハサミで慎重に穴を開けていく。数個の穴があき入るか試していると

G児「これ(実物)みたいに(ボードを二重構造に)するんやったら2ついるで」D児「どうゆうこと？」G児「(使っていない段ボール)これを使って斜めに置いたらできるで！(写真③)」一同「おお～！！(拍手)やってみよう！」G児の

意見を取り入れやってみる。段ボールを手で支え、斜面を作って試すと3回に1回ほど穴に入ったのでその斜面の角度のままテープで固定する。固定した後、ビー玉を転がすが穴には入らずA児「あれ？なんで入らんよにな

ってるん？さっきは入ったのに。」F児「(転がし始める場所を)もっとこっち(穴の上)にしたら？(転がしてみる)入らんわ。」と思ったことを口々に話し始め、自分の考えを試して調整する。そのやり取りをみていたD児が「聞いて！スピードが速すぎやから入らんねん。(ビー玉を転がして)ほら、通り過ぎるやろ。斜めが大きすぎるねん！斜めがちょっとやったら入る」

家でもよく製作をしているE児が入ったことで今までになかったアイデアがでてきたな！

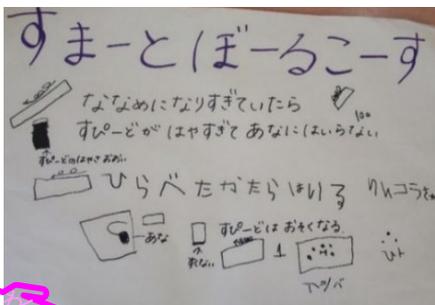
普段はあまり積極的ではないE児がキラキラした目で取り組んでいる！嬉しいな♪

新しい疑問がでてきたな...どう解決するかな？

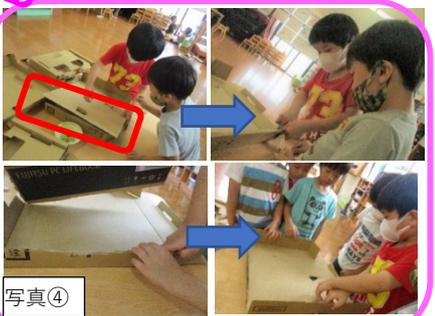
口々に話し始めているな...声を掛けようかな

「ほら、通り過ぎた。」

「斜めが大きすぎる。」



保育者がD児の言葉や考えを皆で共有できるように可視化するために紙に書いているとD児「ペン貸して！」と言って自分の考えを書き始めた。「スピードの速さが多いと入らないから、ひらべたくなないといけない」「(急斜面の時はスピード100で緩やかな時はスピード1)スマートボールは1で作らないといけない」と独自の感性で物事を捉え、説明している。A児が「わかった！」と言い、段ボールを折って壁にしていた部分を切り、少し壁の背を低くした台(写真④)に点数の穴を開けた段ボールを立てかけると先程より斜面が緩やかになり試すと穴に入った。「ほんまや！」と笑顔でD児を見て、笑い合う。それを見て他の友達も次々に転がし、「ほんまや！入る！」「すごー！」と何度も繰り返し遊んでいる。



写真④

◆紙とペンを用意し考えを共有できるように書き出す。



子どもらしいおもしろい発想だな♪

喜びや驚きに共感し、一緒に試す

**【振り返り】**自分たちがイメージするスマートボールを作るが、うまくいかないことで、より本物が作りたいと諦めずに実物を見ながら作る。G児は気付いた二重構造の仕組みを取り入れ、より本物に近づけようとしていた。D児はビー玉が転がるスピードに着目し、急斜面ではスピードが速くなり穴に入らない、角度を平らに近づけるとスピードは遅くなり穴に入るという仮説を立て、分かったことを身振り手振りで友達に分かりやすく伝えた。穴に入った瞬間のD児の「ほらな！」という表情から仮説が確信に変わったことが読み取れた。D児の意見を聞き、「そうゆうことか！」と実践したA児は「ここをこうすれば、どうなる？きつこうなるはず！」という予想を立てて、夢中で微調整する姿から期待が高まっていることが伺えた。ビー玉が入るとD児と顔を見合わせ笑いあった二人を見て心が通じ合っているように感じた。

## 場面6. 8月「先生！！楽しかったな！！！」



A児が「久しぶりにこれ使おうかな。」と以前使っていた段ボールを取り出し、ビー玉を転がそうとするが湿気などで劣化しているので思うように転がらない。🔪「作り直そう！」と新しい段ボールで作り始める。「(壁を)テープで貼ってるからすぐ壊れる。線付けて折る」と言い、スマートボールを作った際に段ボールを折り曲げて作ることで強い壁ができると気付いていたA児は段ボールにハサミで折り目をつけ、折って壁を作っていく。🔪 その様子を見ていた🔪 C児が「壁ちゃんと立ってるやん！これやったらいけるかもな！」と一緒に作り始める。自分たちが遊んできた中で分かった知識を生かしながらコースを作る。試してみるとスピードも速く、何度転がしてもコースアウトしないコースが出来上がった。「コースアウトせーへん！おもしろい！」「壁がちゃんとなってるからやな！」と繰り返し遊び、A児が保育者の手を握り「先生！楽しかったな！」と言う。次の日はB児「ここに当たったら50点な」C児「じゃあ点数作ろうや！」と提案する。A児が家庭で父親と製作したスマートボールの点数を見本に(前日の夕方写真で見せて頂いた)作ることになる。面白い遊びの追求は続いていく。

今までの作り方と違うな。おもしろい！

うまくいかな...！！

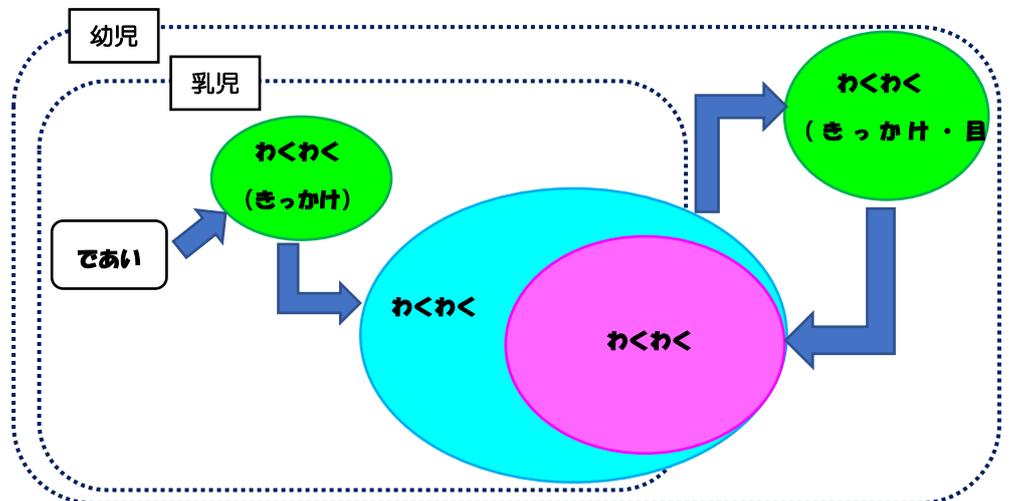
一緒に顔を見合わせて喜びに共感する

◆段ボールや割りばし、画用紙など近くに置き必要なものを選び取れるようにする。

**【振り返り】** 🔪 スマートボール作りの経験から、段ボールを折り曲げたことでより強力な壁になることに気づき、以前よりもコースアウトしないビー玉コースの作り方ができるという確信を持って「作り直したい！」と言っているように読み取れる。🔪 A児の作った壁を見て「この壁だったらコースアウトしないのではないか」という期待を持ち、共通の目的を持って遊び始めたように感じた。繰り返し試してコースアウトしないことが分かると「おもしろい！」と夢中で転がす姿や遊び終わった後にA児が保育者の手を握り「楽しかったな！」と言ったことから達成感や充実感を感じているように見え、保育者も嬉しい気持ちになる。🔪 コースアウトせずゴールまで辿り着いたことで点数をつけたいという新たな目的が生まれた。今後子ども達の豊かでおもしろい発想や考えからどんな遊びに変わっていくのか楽しみである。

**【考察】** 子ども達が遊びの中で“わくわく”している瞬間を大切に捉えながら一緒に遊んできた。ビー玉が転がった事をきっかけに“転がしたい”とコースを作り遊び始めるが、高さ＝スピードということに気づき、落ちたとしても速く転がることに面白さを感じていた。しかし、次第に“コースアウトしたくない”という目的に変わり直角に壁を貼ったり、椅子を並べたり工夫するがコースがたるんでしまうという予想外の事も起きた。どのように改善すればいいかを考える姿から“コースアウトせずにゴールまで転がしたい”というより確かな目的に変わったように読み取れた。スマートボール作りでは自分たちのイメージするスマートボールを作ったがうまくいかなかったことで“より本物へ”という意識が芽生え、モノの性質や二重構造の仕組み、スピードと角度の関係性に気づいた。気づいたことを伝えるために絵にかいて可視化する姿から“友達に伝えたい！分かち合いたい！”という気持ちを読み取る事ができた。疑問や問題に出会った時、友達の意見に耳を傾けることが苦手だった子ども達が遊びを進めていくうちにこれまでの経験を通して、自分とは違う意見があることを知り、それが次の意欲に繋がった。一人の気づきが皆の気づきとなり、予想外のことが起きても諦めず共に考え、喜びや“わくわく”を分かち合える友達の存在がより遊びを豊かにしていくのだと感じた。共通の目的へ向かって遊んでいる時は新たなひらめきや気づきが生まれた瞬間に空気が変わり、真剣なまなざしや会話のやり取りのスピードからも更に夢中になって遊び込んでいることが読み取れた。そこからまた、次の“わくわく”に繋がり、それが友達や保育者、保護者にも伝播していくことが分かった。その瞬間を保育者も一緒に楽しんだり、共感したりしながら向き合った。子どもの“わくわく”に寄り添い、その気持ちを支えることが大切だと感じ、子どもと一緒に“わくわく”できる保育者であり続けたいと思う。

#### IV. 全体的な考察



実践事例を踏まえ、職員間で協議を重ねていく中で、子どものわくわくする心の動きをより深く読み取ることができたので上図に示す。わくわくする心の動きに着目しながら子どもの遊びを追いかけていくことで、遊びをスタートさせるきっかけとなる心の動きに気づいた。また遊ぶ中で何に楽しさを感じているのか、どこに面白さを見出しているのかを読み取ることができ、どのような思いを基に遊びを展開しているのか丁寧に読み取ることができた。

0～2歳児クラスでは、新しいモノとのであいや偶然起こったコトとのであいから心を「わくわく」させ、関わったり遊んだりしていく。その中で、楽しさや面白さを見出し「わくわく」しながら繰り返し遊ぶ。その見出した「わくわく」を基に新たな環境・状況でも試行錯誤しながら遊びを継続させる。また、繰り返し遊ぶ中で違いを感じ取ったり、これまでの経験から乳児期なりの予想や期待を持ったりと「わくわく」しながら新たな楽しさを見出そうとしていく。このようにモノやコトと主体的に関わる姿には、遊びの楽しさや面白さを見出した「わくわく」があるからだと考えられる。

0歳児は箱というモノとのであいや箱から出たボールが足に当たったり、穴からボールが出たり、という偶然のコトとのであいがきっかけとなり「わくわく」と心を動かさ箱と向き合っている。1歳児は、ペットボトルの筒とのであいから「わくわく」し、「入れると転がる」ことに楽しさを感じ、この「入れると転がる」ことを遊びの根幹とした上で、筒という新たなモノとであった時にもその楽しさを味わうために手段や方法を変え、試している。2歳児は「水にモノを落とすことによって鳴る音」に「わくわく」を感じ、その面白さをさらに求めるように自ら落とすモノや状況を変えて「わくわく」しながら遊びを継続している。このように0～2歳児クラスでは「わくわく」が熱中する姿勢へと繋がる遊びの根幹となっていることが読み取れる。

3～5歳児クラスでは遊びの入り口となるきっかけの「わくわく」は確かにあるが、実践事例を読み取っていくと、遊びをより豊かにさせている新たなきっかけとなる「わくわく」があることに気づいた。それはきっかけとも成り得るが、原動力ともなりその後の遊びをより豊かにしていく目的となっていることが読み取れる。その目的を持つことで、これまでの経験や知識を活かし「わくわく」しながら予想や期待を繰り返し探求していく姿へと繋がっている。幼児期は乳児期とは違い、楽しさや面白さを見出す「わくわく」は目立たないが、目的があるからこそ生まれている「わくわく」の背景には遊びを楽しみ・面白く感じる「わくわく」が根幹として存在している。

3歳児では、年上の作っている泥だんごに憧れを持ったことがきっかけとなり「わくわく」し、泥だんご作りをしていく。うまく作れない葛藤がある中で、きっかけとなっている憧れの泥だんごを作りたいという「わくわく」が目的ともなり、遊びの支えとなっていることが読み取れる。また、より固い泥だんごを作りたいという目的を持つことで「わくわく」しながら試行錯誤を繰り返している

姿も見受けられる。その背景には泥だんご作りを楽しんでいる“わくわく”が読み取れる。4歳児は、昨年度のように朝顔で色水遊びをしたいという思いから遊びをスタートさせ、葉っぱや野菜でも色水が作れるという新たな“わくわく”を持ち遊ぶ中で、茄子が紫色にならないという予想外の経験が疑問（“わくわく”）を持つ新たなきっかけとなり、紫色の色水を作りたい（“わくわく”）という目的が生まれたことで、より探求心を持った遊びへと展開している。探求心を持ち“わくわく”しながら目的に向かう姿勢の中にもやはり楽しさや面白さを見出していく“わくわく”も感じられる。5歳児は、ビー玉の転がりに“わくわく”と魅力を感じ、ビー玉の性質を活かし転がすことに“わくわく”させながらコース作りという遊びに発展させる。その中で、コース上を転がしきりたい（“わくわく”）という目的を持ち、試行錯誤している。友達と様々な考えや思いを伝え合っていく中で、共通の目的意識が芽生えることで協力する姿が見られている。また、協力する中で新たな問題や目的意識と直面していきながらも、“よりよいもの＝本物の質”を求めていくことが読み取れる。そのような“わくわく”と比例するように協力して試行錯誤していく姿の質の高まりも読み取れる。

以上のように子どもの“わくわく”を追いかけていくことで、子どもの遊びをより豊かにさせている心の動きが読み取れ、遊びの本質に気づくことができた。本質を捉え、それに基づく援助方法や環境構成を保育者自身も“わくわく”と心を躍らせながら関わり見守っていき、子どもと同様に“わくわく”させながら遊びを紐解き続けていくことが「科学する心を育てる」ことに繋がっていくと結論づけることができた。

## V. おわりに

今回の事例研究で、遊びをより豊かにさせているものは、子どもの楽しい・面白いという“わくわくする心”が根幹となっていることが認識できたと共に、それに携わる友達や保育者という人的環境が備わっているからこそ様々な刺激や影響を感じながら探求していくことが出来るのだと感じる事ができた。その人的環境として最も近い保育者である私たちが、今子どもは何に興味・関心を持ち、どこに楽しさや面白さを見出しているのか、またどういった目的に向かって試行錯誤しているのかを丁寧に捉えていくことが大切だと感じる事ができた。また園生活の中だけではなく、保護者も巻き込み、同じ様に子どもの心に寄り添っていく視点を持ち合うことで、保育者と共に保護者の理解も深まり、子どもにとってよりよい環境を整えることに繋がっていくと感じる。

そして、子どもと同じように心を“わくわく”させながら遊びに寄り添い、時には刺激となるような援助をし、時には子どもと同じ目線で見守ったりすることで、子どもが遊びの楽しさ・面白さを見出していくと同様に、保育者も保育の楽しさ・面白さを感じながら携わっていくことが重要であると改めて感じる事ができた。今後も子どもの“わくわくする心”に寄り添い、保育の原点でもある楽しさや面白さを保育者自身も感じながら追求し続けていきたい。実践事例を基に繰り返し協議を重ねることで、職員間の保育への見取り・意欲を高めることができ、より保育の楽しさを共有し合うことができた。一人一人の価値観や保育観がある中、互いの思いを知り、保育について語り合うことで、園全体としての保育観の共通認識を図ることに繋がった。今後も子どもの“わくわく”を共有し合い、さらなる保育観の共通認識を図り続け、園全体で子どもの“わくわくする心”を追っていききたい。

園長	：高本幸枝
副園長	：川畑整子
主幹保育教諭	：一丸奈津子
研究代表者	：大塚尚宏
執筆者	：仙石優・宮崎佳代・秋保真侑子 秦泉寺有優・大濱園己・樋口梨央